

令和5年度農村RMO推進フォーラム パネルディスカッション概要

テーマ1 外部人材が活躍できる地域や組織とは？

テーマ2 地域の関係者（組織・住民）をどう巻き込むか

- ・2つのテーマについて10文字程度のキーワードを各パネリストが発表
- ・来年度の抱負を漢字1文字で発表

藤山：ここから1時間ほどパネルディスカッションということでお付き合いいただきたい。まず、導入だが農村RMOとは地域組織を指すが、私は農村RMO＝地域社会の持続可能な生態を創ることだと考えている。誰かが独り勝ちするのではなく、多様な組織や人が共創した地域をつくるということが大切であるとする。本日のパネルディスカッションはキーワード方式を進めていく。

(1) テーマ1 外部人材が活躍できる地域や組織とは？

【キーワード1：外部人材が活躍できる地域や組織にとって「大切なこと」】

榎池農業振興会		能登島地域づくり協議会		マイスタープロ グラム修了生	(株)御祓川
平田氏	高木氏	石坂氏	福嶋氏	馬場氏	森山氏
さりげなく	外国・外国人 だと思え	対話と学び	来るもの拒ま ず	夢を語れる組 織	翻訳者

藤山：キーワードの理由をご説明いただきたい。

平田：キーワードは「さりげなく」。嘘をつかず、話を盛らない。陰からさりげなく支えることが大切。

藤山：さりげなさ、しっかり真実を話す、そういうことが大切ということ。

高木：キーワードは「外国・外国人だと思え」。私はここに来る以前は東京で20年間暮らしていたが、同じ日本人でも文化や環境、大切にしていることも違うのでお互いに尊重することが大切だと感じている。

石坂：キーワードは「対話と学び」。外部の方に対する地域の方のアレルギー反応についての話はよく聞かすが、それは先入観と噂話でこういう人だと勝手に思い込んでいる場合が多いと思う。しっかり対話をする中で、その人の本質が見えてくるし、相手の持っているスキルや経験の中には必ずリスペクトできるものがあると思うので、学びあいながら前に進めていくということが大切だと考えている。

福嶋：キーワードは「来る者は拒まず」。自分も10数年前に移住してきたが、地域には温かく迎えてもらったと感じている。受け入れる側になった今は自分もそれを意識して、どんな方でもまずはウェルカムという精神でやっている。

藤山：次はこれまで地域に入り込んでいた側である馬場さんにキーワードをお伺いしたい。

馬場：キーワードは「夢を語れる組織」。地元の方たちが20年後、30年後を見据えて夢や目標を持っている組織は、私のような外部人材も地域に入ってお手伝いしたいと思える。

藤山：最後にアドバイザーである森山さんのキーワードをお伺いしたい。

森山：キーワードは「翻訳者」。例えば東京と能登の文化的な差異は非常に大きい。最初はどうしても「あの人はこういうことを言っているんだ」と翻訳してくれる人が必要。これは地域の中で

も起こっている。若者と高齢者が実は同じことを言っているのになぜかもめているということもある。地域の中、外どちらでもいいので翻訳者の存在は重要だと考える。

藤山：直接いうと角が立つ場合もある。石坂さんにお伺いしたいが「対話と学び」の中で間に立つ人の大切さはどうか。石坂さんご自身が間に入る人となっているかと思うが。

石坂：非常に大変。直接話してほしいと思うこともある。

藤山：しかし石坂さんがいないとぶつかる可能性もあるのだと思う。

藤山：清里のほうはどうか。

平田：自分たちの次の世代のリーダーを探していかなければならない。そのために若い世代と飲んで腹を割って話す機会を作っていた。

高木：移住者の自分としてはやはり文化の違いがあり、言葉通り受け取れないときがある。会議の時には本心を話さない方もいるので、それ以外のあらゆる場を使って咀嚼することが大切だと思う。

馬場：私自身が翻訳者として移住者と地元の方の間に入る場合は、角を立てないようにオブラートに包みながら話を通すようにしている。時にはお酒の力を借りることも。翻訳するための様々な手段を持っていることが大切だと思う。

藤山：多様なチャンネルと場を常に持っている、これも非常に重要。それでは次のキーワードに移りたい。

【キーワード2：外部人材が活躍できる地域や組織にとって「やってはいけないこと」】

櫛池農業振興会		能登島地域づくり協議会		マイスタープロ グラム修了生	(株)御祓川
平田氏	高木氏	石坂氏	福嶋氏	馬場氏	森山氏
さりげなくないこと	同じ日本 (人) だと思う	マウント感	情報は本人から	外部人材への 押し付け	KKO (勘・経験・思い込み)

藤山：これは馬場さんからお願いしたい。

馬場：キーワードは「外部人材への押し付け」。地元の方から出てこない考えが外部人材から出てくるはずがない。地元の方の叶えたいことについて外部人材が協力するものなのだと思う。

藤山：私もよく見聞きすることだが、最悪の場合、外部の方がつぶれてしまうことがある。これには気を付けなければならない。次に福嶋さん、お願いします。

福嶋：キーワードは「情報は本人から」。能登島は凄まじい速さで情報が口頭で伝達される。そのような場合、真偽が分からないような情報もまことしやかに広まってしまうので、他者の話を鵜呑みにするのではなく、本人から真実の話を聞くのが重要。

石坂：キーワードは「マウント感」。地元の間人は外部の方に対して、概して上から目線になってしまうことが多いのではないかと感じる。あとは年齢。年長者から若い世代へ話をする場合も、上から目線になってしまうことがあると思う。自分も気をつけたい。

高木：キーワードは「同じ日本(人) だと思う」。言葉と地域でのしきたりや決まり事が異なることが多い。本音を伺うタイミングはどこかということも含めて地域ごとに差異があり、同じ日本ではないという印象。

平田：キーワードは「さりげなくないこと」。内外の人にうそをつかない。これに尽きるのではない
か。

森山：キーワードは「KKO（勤と経験と思い込み）」。勤と経験と思い込みに基づいて話すと生態系が
上手く回らなくなる。

藤山：ここまでキーワードを挙げていただいたが、人間なのでついマウントを取ってしまった、とい
うこともあるのではないか。そういう場合放っておくと人間関係がクラッシュしてしまうこと
さえある。そのような経験についてお伺いしたい。馬場さんはいかがか。

馬場：自分が聞くと同じ話をしているのに、どうしてこの2人はもめているのだろう、と思ったこと
がある。

藤山：その件は最終的にどのように解決したのか。

馬場：まさに対話と間に入る翻訳者の存在が大きかった。

藤山：能登島ではどうか。

石坂：自分はあえて修復しようとはしない。むしろ自身の信じる道を進むほうが自分のメンタルは保
たれると思う。もう1つはあまり遠慮をしすぎないこと。人生の先輩であっても言うべきこと
は言わなければいけないし、年下に対しては話やすい雰囲気を作ることは大切だと思ってい
る。

藤山：地域内で風通しのよい環境をつくることは外部人材の方にとっても重要かもしれない。福嶋さ
んはどうか。

福嶋：地域には目に見えないネットワークがたくさんある。あまり深い入りしないほうがいい場合も
あれば、血縁などがない自分が発言することでうまく収まる場合もある。

藤山：誰がどう発言するかで状況が変わる場合もある。高木さんはいかがか。

高木：現状について客観的にお話する会議があったが、客観的に話したことが悪口に聞こえ、相手方
を怒らせてしまったことがある。その際はすぐに直接謝罪し、仲良くなることができた。また
その上司の方にもすぐに謝罪し、理解してもらうことができた。

藤山：ピンチをチャンスに変えている。それを見ていた平田さん、いかがか。

平田：確かに大変だったが彼女は行動が速く、冷めないうちに本人、上司に謝罪したのがよかった。
それぞれの方の人となりを理解し、重ねて丁寧にやっていかなければならない。

藤山：時間がたつとまた話が変な方向に進む場合もある。すぐに対応するという事は非常に大切
だ。

森山：地域の「謎ルール」を分かりやすく示すことが大切であるし、その「謎ルール」自体を見直す
機会をつくるのが外部人材の存在。基調講演でも話した「集落の教科書」は外の人に示すだけ
でなく見直しの機会にもつながっている。一方でもめた状態のままにしておくというのも1つ
の方法。それがルールの見直しにつながる。

藤山：集落のほうも風通しの良い環境になるようブラッシュアップしていかなければならない。先ほ
どの「集落の教科書」に近いが私のほうでも移住支援を行う際は「暮らしの手引き」を作成す
ることをお勧めしている。このあたりはぜひ、農村 RMO でも取り組んでいただきたい。では次
のテーマである「地域の関係者（組織・住民）をどう巻き込むか」に移りたい。

(2) テーマ2：地域の関係者（組織・住民）をどう巻き込むか

【キーワード3：地域の関係者（組織・住民）をどう巻き込むか】

楡池農業振興会		能登島地域づくり協議会		マイスタープログラム修了生	(株)御祓川
平田氏	高木氏	石坂氏	福嶋氏	馬場氏	森山氏
3人、5人、7人	相手の景色で話す	未来のイメージの共有	声かけ順と根回し	幅広の関わりを持つ	巻き込まない

藤山：地域においていかに裾野を広く、いろいろな住民や団体を巻き込むかについて、この辺が勘どころだということをお伺いしたい。

平田：キーワードは「3人、5人、7人」。スタートに3人、方策を練る打ち合わせに5人集まり、彼らが地域の方々に対して話し合いを重ね、今の楡池農業振興会が立ち上がった。

藤山：ごっそり、地引網のように巻き込めばいいというものではない。1歩1歩丁寧に説明することで相手の心が動く。高木さんはいかがか。ビレッジプラン策定のときも非常に多くの人を巻き込んでおられた。半面苦勞もあったと思う。

高木：キーワードは「相手の景色で話す」ということ。私のビレッジプラン策定時の景色は地域が「楽しい」ということだったが「楽しい」だけでは響かない人がたくさんいるということを実感した。相手の景色を見て、相手のメリットも踏まえて話をする、仲間にするということが必要と感じた。

藤山：相手の心に何が映っているのか。何が響いて何が響かないのか。非常に深いところだがこのあたりを読むことの大切さということか。石坂さんはいかがか。

石坂：キーワードは「未来のイメージの共有」。能登島では意外と将来の自分の地域を描けている人が少ないように思う。問題や課題を投げかけたときにどう思うかは人それぞれだが、「自分はこういうことにチャレンジしたい」ということを示し理解してもらったうえで、「乗るか、乗らないか」を判断してもらいたい。そういうイメージの投げかけをするのが重要だと思う。

藤山：今おっしゃったことは馬場さんが最初に挙げたキーワード、「夢を語る組織」にも通じるころだと思う。これからの農村 RMO 形成に非常に重要。私も地域において人口シュミレーションなどを行っているが、最近はやらせているのが、子どもがレゴブロックを使って地域の未来の姿を具体的につくるということ。これは毎回素晴らしいものができてくる。それを見て大人たちもさらに奮起する、そういう相乗効果もある。では次に福嶋さんのキーワードをお伺いしたい。

福嶋：キーワードは「声かけ順と根回し」。事務局をさせていただいている中で、どうすれば前に進められるかということをお学ばせていただいた。小さな地域だからこそ、このような関係性を意識することは重要だと思う。

藤山：かつて地域にいらっしゃった「生活改良普及員」という方はまさに地域の生態系を把握していらっしゃる方であった。ガチガチすぎてもよくないが一種のリスペクトは大切だということ。馬場さんはいかがか。

馬場：キーワードは「幅広の関わりしろ」。仕事や生活は人それぞれであり、人によって地域の活動にかけられる時間や労力は異なる。目指している方向性が一緒なのであれば、そういう人を巻き込んでいくことが理想であるので、多くの人に関われる「関わりしろ」やほんの少しの参加でも OK という「寛容さ」が大切になると思う。

藤山：この点は非常に重要。私の本のなかでも「コンマXの社会技術」というのを唱えている。自分の時間の無理のない範囲のコンマいくらかを地域の活動に向かせるという考えであり、1人1人の力は小さくても人数が増えれば大きな力になる。最後に森山さんに伺いたい。

森山：キーワードはあえての「巻き込まない」。小さく書いたのは「巻き込まれたと思わせない」。中心にいる方は「巻き込む」という考えだが「巻き込まれたくない」と思っている方もいる。翻訳者が間に入り、「あなたのやりたいこととこの部分が重なっている」と重なりを示したり、やることへの意味づけをおこなったりということが必要だと考える。「外部から来た人間が勝手に何かやっている」ではなく、「地域のみなさんがこれまで取り組んできた土台の上でこのような活動を行う」ということをしっかり示すことが協力して地域の未来を創っていくことにつながる。

藤山：まさにそのとおり。地域が「遠心力」でまわるととてもしんどい。そして1人離れると次々に離れていく。一方で1人加わると次々に人が加わっていくということもある。うまく「巻き込まれた」経験を馬場さんはお持ちか。

馬場：飲み会に誘われて参加するとそのまま入団してしまうということはあった。田舎の人が良く使う戦法なのかなと思うが、求められるのが嫌なわけでもないので最後は自分の判断。

藤山：福嶋さんはどうか。

福嶋：今ここにいて巻き込まれ続けているとは思っている。しかし、おかげでずっと面白い経験ができています。自分が提案して、企画したアイデアを「やってみれば」とやらせてもらっている。そういう意味では自分が「巻き込んでいる」のかもしれない。

藤山：能登島の方々の深さを感じる。さて、時間も残り少なくなってきたということで、最後にみなさんの今後に抱負を漢字1文字で伺いたいと思う。

【キーワード4：今後の抱負を「漢字一文字」で】

榎池農業振興会		能登島地域づくり協議会		マイスタープロ グラム修了生	(株)御祓川
平田氏	高木氏	石坂氏	福嶋氏	馬場氏	森山氏
継 or 承	誇	継	携	学	共

平田：今清里でスタートした「農育連携」を今の子どもたちの親世代につなげていきたい。

高木：上越の方言では地元を「こんつらとこ（こんなひどいところ）」という。でもこれまで地域を守ってきた人、受け継いできた人は何かしらの誇りをもってやってきている。自分が誇れることをして、その背中を見た周りの人たちにも誇りを持ってもらい、その誇りを子どもたちにつなげていきたい。

石坂：自分は今49歳だが、今この年齢でも次世代に継ぐという意識をもってやっていきたい。

福嶋：地域では弱っているところがあるが手を携えていけばまだまだやっていける。そういう連携を進めたい。

馬場：個人的なことになるが地域づくり協同組合の事務局としてまだまだ地域の企業のことなど知らないこともある。もっと地域や企業について知って学ばなければならないと思っている。

森山：共創の「共」。この地域で共に生きていく、そして地域の外に人とも関わり合いながら未来につなげていく、そんなことを感じさせるフォーラムだったかと思う。

藤山：最後にみなさんの一文字を見ていきたい。ベテラン世代が「継」と重なった。そして「共」。世界は「競争」から「共創」、「共有」の時代になっている。これからやってくる循環型社会は農村にとっては決して悪いことではない。長い目でみれば農村にとっても希望があると思う。今日のフォーラムは農村における外部人材の在り方や、農村 RMO に人が連なることについて具体的なエピソードを添えてお話いただいた。会場のみなさまもオンラインのみなさまも「なるほど」と思うことが度々あったと思う。さらに深く知りたいことはぜひ現場で、そして地域同士は成功例も失敗例も共有し共に前に進んでいっていただきたい。本日はどうもありがとうございました。